

3 - 3 研究所の教育相談における実践事例

3 - 3 - 1 教育相談場面における運動障害のあるKくんにとっての応答する環境

石川 政孝（重複障害教育研究部）

1 Kくんとの出会い

Kくんは、とても自発的な意欲に満ちた人である。Kくんは、現在肢体不自由養護学校の小学部1年生である。研究所には2歳5ヶ月の時から約月1回のペースで定期的に相談に母と共に来所している。筆者が前担当者から担当を引き継いだのは、Kくんが4歳になった時からである。当時の相談の主訴は、Kくんが母親など周囲の係わり手が理解できる表出手段をもたないために、本人も自分の意図が伝えられずに、イライラしたり泣いたりすることが多くて対応に困るということであった。1歳と2歳の時には原因は不明であるが、円形脱毛になったことがある。

2 Kくんとのやりとりの始まり

筆者は、まず、コミュニケーション手段の獲得が第一と考え、運動障害があってもスイッチを利用したおもちゃ遊びの中で楽しみながら、コミュニケーションエイドに結びつけることができるのではと考えた。しかし、実際、学習室で筆者が楽しいだろうと思う準備された教材・教具はことごとく彼の興味関心から外れ、彼の表情は陰しくなるばかりであった。Kくんは怒ったような表情で、学習室の出口に顔を向けてうなるような声で訴えた。それが何を訴えているのか、筆者も母親もわからなかったが、ちょうど練習を始めていたウォーカーを持ってくると、Kくんはぴたりと唸るのをやめ、サドルに座るやまだ空蹴りの多い足を動かし、廊下を少しずつ進み始めた。きらりと光るドアの取っ手やノブ、非常口の表示灯に手を伸ばしては次に進んだ。この日以降、相談の場はKくんの選択によって学習指導室ではなく、研究所全体に広がった。

3 Kくんがイニシアチブをとる探索活動

Kくんは研究所に来ると、歩行器でまず玄関の自動ドアの開閉を十分納得がいくまで眺め、次に玄関ホールのエレベータへと向かっていった。ウォーカーの操作が十分でなくとも、彼の行きたい方向は彼の顔の向いている方向ではっきりと読みとれた。筆者と母親は、彼の行きたい方向に従いウォーカーの向きを援助しながら寄り添い、彼が手を伸ばしたのものには「触りたいの?」と確認し、彼の手に筆者の手を添えて指し示したものに実際になんでも触れられるように援助した。こうしたKくんがイニシアチブを取るかわり合いの中でKくんは表情や手の動きなどの仕草で、YesとNoを母親にも筆者にもはっきりと読みとれるようになってきたと共に、Kくんが何がしたいのかをKくんの文脈で読みと

図3-3-1-1パソコンで所内の場所の写真を見る

れるようになってきた。

K くんは活動に寄り添うことによって、K くんも、筆者の提案した課題に取り組む様子がみられるようになった。パソコンに K くんが探索する場所の写真を入れ、Wing-SK を利用してスイッチでページをめくるようにした。

自分が歩いて回る場所が画面に次々と現れ、一枚一枚の写真を喜んでみた。

(図 3 - 3 - 1 - 1)

4 探索活動からコミュニケーションが生まれる

所内を探索する内に、彼はエレベータや自動販売機などのボタンに興味をもった。普段は、十分探索したくてもできないことが、この研究所では納得がいくまで探索することができる。

図3-3-1-2 VOCAで「先生お願い」と発する。

また、学習室を出たことにより、母親と筆者とのやりとりから所内の職員や研修員とのコミュニケーションの機会が生まれ、自動販売機では、お客さんに代わってジュースを買ってあげて「ありがとう」とお礼を言われたり、図 3 - 3 - 1 - 2 のように VOCA (音声表出補助装置) で「先生お願い」、「ぼくは K です。あなたのお名前は？」といったメッセージを相手の表情の変化を見て発するようになってきた。

K くんが、相手の表情の変化を見ることは、「いたずら」にも発展した。相手がびっくりしすることを期待して、わざとものを落として楽しむ様子がみられ、本気で怒った母に叱られてべそを掻くごく普通の親子の間のやりとりがみられた。

5 もののもつアフォーダンスと人のもつアフォーダンス

コミュニケーションの機会は、それを受け止める状況があって初めて、人との結びつきとして成立する。彼は本が大好きである。現在は読むためのものというよりもむしろ、

図3-3-1-3 握手しよう。

整然と並んだ本棚から本を落とす行動に駆られる。本が持つ彼にとってのアフォーダンスである。そのような本のアフォーダンスに引き寄せられ、図書室が彼の探索経路になったことがある。彼が図書室手前の事務室のドアノブに手を伸ばすのを受けて、筆者といっしょにドアをノックすると、たまたま中から笑顔で出迎えてくれる職員がいた。K くんはその職員に向けて手を差し伸べ、その職員は、自然に手を握り握手をした。話し言葉がでない彼とその職員との自然な会話があると筆者は感じた。(図 3 - 3 - 1 - 3)

6 KくんとTHEY世界とのつながり

Kくんの現在のコミュニケーション・ツール（道具）は、表情と仕草と具体物への指さしである。Kくんがものや人とかかわる中で、「入れ子」のように具体物に付着された様々な記号が既に彼の視野には自然の内に知覚されているはずである。＜ひと＞や＜もの＞のもつアフォーダンスがKくんが生活する中で彼の行動の中に埋め込まれていくのではないだろうか。

その子その子の興味関心は基本的に異なり、多様である。係わり手が決めつけることなくその子の興味関心がどこに向いているのか、その子の環境との相互作用の有様を、その子の行動をじっくりと係わる中で見つけ、そこからさらに、THEY世界への広がりや深まりを共に見出していくことが、その子にとっての「応答する環境」の開発になると考えられる。

参考文献

Gibson,J.J.：生態学的視覚論ヒトの知覚世界を探る 古崎敬他共訳 サイエンス社1985.
石川政孝：遊びの中でコミュニケーションを支持する試み 重度・重複障害児の事例研究 第二十四集 国立特殊教育総合研究所重複障害教育研究部. 2001.